

桜木紫乃『蛇行する月』論

* 小田島 本有

—「しあわせ」の捉え方—

Motoari ODAJIMA

A study of Sakuragi Shino "Dako - suru tsuki(Meandering moon)"

—The point of view about happiness—

一

「ねえ順子、年賀状にしあわせだって書いてあった。わたしあれ、信じたんだよ。だから会いにきたの」

順子の眉が寄った。桃子の言葉が理解できないようだ。(1990 桃子)

桜木紫乃『蛇行する月』の中でもとりわけ象徴的な場面と言えよう。ここでは順子と桃子が捉える「しあわせ」のあり方が決定的に異なっている。

順子は妻のいる年の離れた男性と駆け落ちまでした。年賀状で自分が「しあわせ」と書いてきた須賀順子に、藤原桃子がわざわざ六年ぶりで東京まで会いに行こうとしたのは、その時の桃子自身が自分の「しあわせ」というものに自信が持てていなかったからである。

久しぶりに会う都会の友人に気後れするまいという気持ちから、桃子はおしゃれをして渋谷のハチ公で待ち合わせをした。ところがそこに現れた順子は地味そのものの格好で、しかも小さな男の子を連れている。そして順子の希望で桃子は都心から遠く離れた自宅まで連れていかれた。そこで桃子が目にしたのは「宝食堂」というあまり繁盛していないように見えるラーメン屋と、そこで暮らす贅沢とは無縁の順子たちの生活だった。しかも、順子は入籍していない。桃子にしてみると、そこに「しあわせ」のかけらも感じられず、裏切られたような思いがしたのである。

だが、一方の順子は桃子の言葉が理解できない。なぜなら、順子は自分を「しあわせ」と感じており、わざわざ昔の同級生を自宅まで連れて来たのも、もちろ

んお金を節約したいという意識もあっただろうが、それ以上に「しあわせ」な家庭の姿を直接見てもらいたいという思いがあったからである。

ここで挙げたのは一つの例だが、『蛇行する月』に登場する女性たちは、誰もが本当にいま自分が「しあわせ」なのかどうか、十分な確信が持てないでいる。そして自ら「しあわせ」を公言してはばからない順子との違いに戸惑いながらも、やがては自らを改めて見つめ直さざるを得ない方向に導かれていくのだ。

『蛇行する月』が刊行されたのは、二〇一三年一〇月のことである。その三か月前に桜木が『ホテルローヤル』で直木賞受賞が決定したとの発表がされたばかりだった。作品は「小説推理」に連載された六編の短編から成り立っている。それぞれの発表時期は次のとおりである。

「1984	清美	二〇一二・三
「1990	桃子	二〇一二・五
「1993	弥生	二〇一二・七
「2000	美菜恵	二〇一二・九
「2005	静江	二〇一三・一
「2009	直子	二〇一三・三

それぞれの章段に出てくる女性たちはいずれも何らかの形で須賀順子と関わりを持った人たちである。六名のうち清美、桃子、美菜恵、直子は順子と道立湿

原高校での同級生、弥生は順子と駆け落ちした男の妻、静江は順子の母親である。このそれぞれの視点から時間系列に沿って書かれた短編を連ねていくオムニバス形式は、『ホテルロイヤル』でも見られた。ただし、『蛇行する月』が時間の流れに沿った形式であったのに対し、『ホテルロイヤル』のそれは時間を遡る形式であったのが決定的な違いである。

それぞれの短編がお互いを補填し合うという点で両者は共通していた。一見するとバラバラに存在していたはずの個々の短編が、読者の想像を駆使した読書行為によって埋められていく醍醐味をこの二作は味わうことが可能だ。

作者の力業は、それぞれの短編への目配りを怠らず、それぞれが互いに呼応し合い、最終的には一冊の本の中で物語が形成されていくよう執筆が行われたことに求められよう。ある一つの事柄をとつても、それが時間を隔て別な人物の視点で眺められたとき、それは別の相貌で読者の前に現れてくるのであり、そのことが作品の広がりにも繋がっている。

『蛇行する月』は、須賀順子の生きざまを彼女と関わりを持った女性たちの視点で浮き彫りにした作品である。作品のタイトルにもなっている「蛇行」は順子をはじめとする登場人物たちの生きざまを象徴する言葉である。しかも、話題の中心であるはずの順子を主人公にした短編を取って設けない、というスタイルもまた「蛇行」そのものであったと言えるのではないか。

二

「1984 清美」における戸田清美は、自分に自信が持てずにいた女性であった。しかし、それは当時彼女が田島勇という男性と付き合っていたことが大きく影響していたとも言える。

この二人は付き合っていたというものの、関係は決して対等なものではなかった。もともと小説家志望だったこともあり、彼が書いてくる手紙は漢字が多く、世界の名作などを推薦本として挙げてくるのが常であった。つまり自分が「教える」側、清美が「教えられる側」という位置づけが勇には明確にあった。しかも彼は相手のことにはどちらかというと無頓着で、自分の職場での不平不満はさかんに言うけれども、一方の清美が割烹ホテル「かぐら」での酷い扱いを訴えてもそれを真剣に聞く姿勢を見せていたわけではなかった。

そもそも清美が勇に当初心惹かれたのは、彼が職場での不満や怒りを口にする姿が新鮮に思えたからである。同様に職場に対する不満を抱えながらも家庭の事情で辞めるわけにいかず、鬱々とした日々を送っていた彼女にとつて勇は自分がないものを備えた魅力ある男に見えたのだ。

しかし、子細に見てみると、勇は他者と本質的に関わるこのできなかった男だということが分かる。職場に対する不満は、おそらく清美の前だけで発散されるものであり、その点で彼は内弁慶だった。聴くクラシックもバッハのみというこだわりも、見方を変えれば自分の価値観への固執と言えなくもない。職場への不満という点では勇も清美も同じものを有していたはずなのに、その発散は絶えず勇からの一方通行だった。そう考えていくと、職場に対する不満の要因を作り上げていたのは他ならぬ勇自身であり、そのことに本人が気づかなかっただけの話かもしれないのだ。

勇は絶えず自分を上位に置き、他者を下に置くという発想から抜け出すことができなかった。それは清美に対する態度にも端的に現れている。清美が北海道中央電力株式会社に願書を出し、最終選考の面接まで残ったときも、彼は「お前が受かるようなところじゃないよ」と、断定的な言い方をしている。結果が通知される日に勇が清美に電話を掛けてきたのも、落ちることを想定してのものだった。合格を知らされた時の彼はしばらく沈黙し、最初に発した言葉が「嘘だろ」だったことがそのことを証明している。彼は清美の合格という事実に動揺し、「おめでとう」の一言も発することができない。挙句の果ては「もしかしてお前さ、俺に勝ったと思っていないか」「優越感に浸ってんじゃないか」と言い出す始末である。それまで優越感に浸っていたのは清美ではなく、勇だった。この場面で勇の人間としての器の小ささが端無くも現れてしまったと言うべきだろう。

勇には清美を正當に眺めることができていなかった。彼女が難関と言われる電力会社に受かることができた大きな要因が、どうやら彼女の字の美しさにあったらしいことが作品から伺える。願書を受け取りに行った際、それまで無愛想だった窓口の男が彼女の文字を見て「あんた、ここ受かるといいねえ」と表情を和らげたこと、さらに面接試験の際にやはり面接官から「字がきれいですね」と褒められ、「ワープロとかタイプもあることにはあるけれども、結局手書きがいちばんだと僕は思っています」と言われているのだ。彼女はこのとき、高校時代の友人たちがテストになると彼女からノートを借りていたことを思い出す。それは久

しぶりに彼女が自信をもてた一瞬だったのである。

このとき、彼女ははつきりと気づいた。自分は今まで男に合わせようとしていただけだった。だからと言って、彼を理想の男性として評価していたわけではない。大した男ではないが、いないよりはマシという程度のものであったのである。

清美は男と身体を重ねる時も周到に避妊だけは怠らなかつた。もともと彼女は勇の子供を産むつもりもなかつたし、妊娠することは「失敗」だという認識が彼女にあったことが、彼女にとつての勇という存在を浮き彫りにさせている。

それに対し、同級生の順子はかなり年の離れた男性と関係を持ち、妊娠をきっかけに駆け落ちまでした。そして出産をし、入籍はしていないものの結婚生活を継続させている。順子の生き方は確かに反社会的と言えるのかもしれないが、彼女なりの意志がしっかりと感じ取れるのである。

このように「1984 清美」の章段では、どちらかと頼りなささを感じられた清美であつたが、その後彼女はすっかり変貌した姿を見せている。その十六年後にあたる「2000 美菜恵」に登場する彼女は、電力会社で二十代のうちに職場結婚した。それ以後の清美の姿には昔の面影がすっかり失われている。

婚約指輪を捨てそうな勢いで「いい加減にしてほしいのよ、あいつ」と怒鳴っていたのは清美だ。結婚式の日取りが決まつてから親との同居を言い出され、いつときは本気で婚約解消を考えた清美も、今は二世帯住宅で「年寄りに一切の干渉をさせない暮らし」を実践中だ。

「清美のところ、彼の親とはどうなつてんの？」

会社で亭主よりも役職が上になつたとき、夫の親ふたりを前にして「今後、自分の仕事についてつべこべ言つたら別れる」と啖呵を切つた話までは聞いたが、それ以後どうなつていいのか。あけすけに訊ねても誰も責めない。清美は笑いながら言つた。

「口を出すなら金も出せつて感じ。冷戦だな」

(2000 美菜恵)

彼女がこのように大きく変わるきっかけとなつたのは、とりもなおさず男との別れを決意した時であるのは間違いない。夫との関係においても、彼女の方が明らかに主導権を握っている。『蛇行する月』のオムニバス形式は、このような姿を浮き彫りにさせる点で非常に効果的である。

冒頭で藤原桃子が東京で順子と会い、「しあわせ」だと語る順子の生活の実態を目の当たりにして愕然とした場面を取り上げたが、当時桃子はシーラブ号の乗務員となつて六年が経過しており、同船する北村直樹と不倫関係にあつた。北村は三十八歳で妻子がいる。彼との関係ができて一年が経過していたが、当初妻とは別れると言つていた北村は最近ではそのことを口にするともなくなり、曖昧な状態で関係が継続されていた。

自分と北村との関係に疑念を抱き始めていた桃子にとって、順子からの年賀状に書かれていた「しあわせ」の一語は彼女の心を刺激するに十分なものがあつたのである。順子がいう「しあわせ」な姿をこの目で確かめたい。桃子はそう思つたのだ。

久しぶりに再会した順子は、桃子の目には「しあわせ」とは程遠いものに感じられた。それは桃子が思い描いていた「しあわせ」とはそもそも土俵が違つていたからである。

順子は駆け落ちの頃の経緯を桃子に語つた。順子は高校卒業後、和菓子屋に就職するが、そこで腕のいい職人として働いていた男と深い仲になつた。相手はこの和菓子屋の女将の亭主である。当時彼は四十過ぎであつた。彼は順子の前で「初めて女の人を好きになつた」と言つて声を出して泣いた。そればかりでない。当時のことを順子はこう語る。

「だって、そんなに好きになつたつていうのに、妊娠したつて言つたら、逃げられるものなら逃げたいつて言つたんだよ。根っこは谷川と同じなんだ。だけど、あんまり正直に言われたらこつちも真剣になつちやつた。何からそんなに逃げたいのか訊いたら、わたしからも腹の子供からも、すべてから逃げたいつて言うの。ひとりで行かせたらこのひと死んじゃうと思つたら、こつちの腹が据わつた。だから、一緒に逃げてでもいいよつて言つた」 (1990 桃子)

年は離れていたものの、状況を動かしたのは順子だつた。相手の男は初めて女性を好きになり、順子を孕ませたことで明らかに動揺していた。「すべてから逃

「いたい」という言葉を聞き、相手の死を恐れた順子は彼と一緒に逃げる覚悟をした。このとき彼女は「お父ちゃん」の庇護者となり、彼の人生を丸ごと抱え込む覚悟を決めたのである。少なくとも、現在の順子の生活はたとえ周囲の目には見すばらしいものに見えたとしても、それは何ら恥ずるところがない。それが自らの意志で決めた結果だったからである。そして、順子は終始笑っていた。それが桃子には解せなかった。しかし、順子との久しぶりの再会は桃子の心に深い痕跡を残すことになった。

桃子はホテルの部屋に戻り、ちいさな浴槽に体を沈めた。(略)

理由のわからない涙が次から次へとあふれてくる。順子のいう「しあわせ」が悲しいのか、ずたずたの優越感がさびしいのか、順子の前で泣いた男たちのそれぞれのずるさが憎らしいのか、わからなかった。気づくと順子の名前を呼びながら泣いていた。

(1990 桃子)

その後もしばしば桃子は順子のことを想起する。桃子にとって、それまで自明だったはずの「しあわせ」の輪郭がぼやけてしまっていた。絶えず笑顔を浮かべていた順子と、ホテルの浴槽で理由もわからず涙を流す桃子。二人の姿は実に対照的だ。

戻ってから、桃子は段ボールに荷物を詰め込みそれを順子に送る用意をする。そのとき桃子の書いた手紙に書かれたのは、「わたしずっと、順子是不幸だと思ってた。重ねてごめん。あれからしばらく考えていました。順子のことやお父ちゃんや輝くんのこと。正直、今も頭を離れません。ずっとずっと、しあわせでいてください」という文句だった。

この言葉から伺えるのは、桃子が順子の現在の姿を「しあわせ」と認め、その永続を願ったということである。しかし、彼女はこの手紙をいったんは箱に入れたながらも再び取り出し、封筒ごと裂いた。ここには桃子の大きな心の揺れを認めることができる。ひとたび、桃子は順子を「しあわせ」であると認めた。だが、そうすると今まで桃子自身を支えていたはずの「しあわせ」の観念は脆くも崩れ去ってしまうことになる。桃子自身が思い描く「しあわせ」には絶えず周囲に対する眼、あるいは見栄があった。今の順子を「しあわせ」と認めてしまうのは、自らの屋台骨を失うに等しい。それが桃子には許せなかったのである。新たに桃

子を書き直した言葉は「このあいだはありがとう！ 桃子」という実に単純なものだった。一瞬たりとも心が揺れ動いた事実を隠そうとする姿に、桃子という人間が見えてくる。

四

「1993 弥生」は、夫の恭一郎に駆け落ちされた福吉弥生を主人公とする章段である。弥生は老舗「菓子や 幸福堂」の女将。父親から店を受け継ぎ、父の意向でそこで働いていた腕利きの職人である恭一郎を夫として迎えたのであった。

夫の失踪から七年が経過していた。弥生には夫の失踪の理由が今でも分からない。作品中には「子供には恵まれなかったが、夫婦仲は悪くなかったはずだ」という一文がある。「悪くなかったはずだ」という言い方から伺えるのは、この夫婦は無難な関係であり、それ以上でもそれ以下でもなかったということだ。

そもそもこの夫婦の成り立ちがそうだったのである。先代、すなわち弥生の父親は娘に和菓子職人としての腕をつけさせることをせず、腕のいい職人と娘を結婚させることで店の存続を図ろうとした。つまり、恭一郎と弥生は店を守るという親の意向によって成立した夫婦であり、そこに当人たちの自発的な意志はなかった。とりわけ、恭一郎にとって弥生はあくまでも店のお嬢さんであり、愛すべき一人の女として認識されていたわけではなかったのである。

ただ、その恭一郎が一点だけ知らないことがあった。それは商売っ気がなくひたすら和菓子をつくることに精魂を傾ける恭一郎に対して、弥生がもともと密かに恋心を抱いていたという事実である。弥生は本来思いを寄せていた和菓子職人と夫婦になったことで満足し、「しあわせ」だと感じた。しかし、弥生の結婚はただ親の敷いたレールに乗っただけであり、そこに落とし穴があった。「職人」と「お嬢さん」は結婚しても「夫」と「妻」(あるいは「男」と「女」)にはなり切れていなかったと言うべきである。弥生は恭一郎に自分の思いを伝え損なった後年、恭一郎は順子と出会ったとき、「初めて女性を好きになった」と言っているが、恭一郎は妻の自分に対する思いを知り得なかったのである。結婚に際して弥生が自分の思いを打ち明けていれば、この夫婦のあり方は変わっていたのかもしれない。

夫の失踪から七年が経過していた。失踪宣告の届けを出せば成立する状況に彼女はいる。審判が下りて十日経つても彼女は届けを出さず、期限は数日後に迫っていたわけだが、ここに彼女のためらいを伺うことができる。

彼女のためらいとは何か。失踪届を出すことで、恭一郎をこの世から抹殺してしまうことに彼女は抵抗を覚えていたのである。今では、彼女を支えてくれる「菓子処　をざき」の三代目尾崎悟という存在もいた。尾崎は妻が死亡し、独り身でいる。この二人を遮るものはほとんどない状態であり、弥生にとっても夫であった恭一郎に対する未練はもはやなかった。

ただ、弥生はかつての光景が心に引つ掛かっている。順子の仕事ぶりはまじめであり、明らかにおかしいのは夫だった。夫の心が若い順子に傾斜していくことに気づきながらも、彼女は夫にそのことを問い質すことができなかった。夫への遠慮があったわけだが、ここにこの夫婦のありようが伺える。この二人は本当の意味での夫婦にはなっていなかったのである。

失踪届を出す決断が迫られているやさき、彼女のもとに父親の古い友人からの手紙が届く。この友人は順子の紹介者でもあった。順子が不祥事を起こしたわけであるから、彼としてはそのことを詫げる思いは未だに消えていない。その彼から失踪した二人の居場所が判明した旨の連絡があり、そこには「宝食堂」の住所も記されていた。

それを頼りに弥生は東京へ赴き、恭一郎と久しぶりの再会を果たした。ここで彼女は恭一郎を責めることをしていない。彼女は、彼の前に失踪届と離婚届を提示し、そのどちらを選ぶか彼の判断に委ねたのである。これは彼女が決められなかったからだ。

恭一郎の荒れた指先が、離婚届の上に伸びた。弥生は安心し、そのような心もちになった自分に満足しかけた。開いた手のひらが届け出用紙を覆う。広げた指先が紙を巻き込み握られた。

弥生は夫の手の中で皺だらけになった離婚届を、ぼんやりと見ていた。どちらかを選ばせたのは自分だった。胸の真ん中に向かって、ゆっくりと刃先が入ってくるような感覚に襲われた。急いで目を瞑る。

(1993 弥生)

恭一郎は離婚届を握りつぶし、自分を亡き者とすることを選んだのである。こ

れは恭一郎にとって自己処罰の意味合いが込められていた。弥生にしてみれば、彼が離婚届を選択してくれば、もつと気持ちには楽だったかもしれない。弥生は恭一郎の選択を目の当たりにして、彼の詫げる思いを痛切に感じ取ったのである。これが恭一郎の判断であり、弥生が彼の気持ちを尊重したことは、東京から戻って尾崎に電話をかけた際、「夫はおりませんでした」と報告したこと伺える。そのことは弥生が尾崎との新しい人生に一步踏み出したということの意味する。ちなみにこの章段では、弥生が訪れた「宝食堂」の周辺は街全体がさびれている様子が丹念に書かれていた。「宝食堂」に直接入ることができず、弥生は向かいの喫茶店「終着駅」に入り、そこに恭一郎を呼び出したのだった(呼び出すにあたっては、店の前にいた彼の息子に声をかけ、伝言を依頼した)。恭一郎を待っている間、「終着駅」のマスターが「向こうもあまり入ってないみたいだな」と呟く場面がある。それから十二年後、ここはこのように変貌していた。

春の陽気が商店街の閉まったシャッターやサドルを失った自転車に降り注いでいた。宝食堂の暖簾は風になびくでもなく、だらりと軒にぶら下がっていた。一歩ずつ暖簾に近づきながら、静江は何度も腕の時計を見ては「土曜日の昼過ぎ」を確認する。来週の休みを交代してもらったの一泊だった。ぐるりと見回す商店街で、宝食堂だけがぽっかり浮いている。はす向かいの喫茶店は廃業してずいぶん時間が経つようだ。入り口のドアに貼られた「貸物件」の紙も、日に焼けて端が丸まり破れている。

(2005 静江)

「終着駅」は廃業を余儀なくされたのであった。ちなみに「終着駅」のマスターは弥生に対して計らいを見せていた。弥生は「終着駅」で恭一郎を待ち続け、その間にカレーとコーヒーマスター三杯を注文したのだが、彼女が店を出る時会計を済ませようとすると、彼が出した会計はカレーとコーヒーマスター一杯分だった。彼は恭一郎と弥生の様子を見ており、何か感じるところがあったのだろう。

五

小沢美菜恵も同級生だった須賀順子を意識し続けた人間の一人だった。彼女はかつての高校時代の恩師であり、現在は職場で同僚となっている谷川と婚約中で

ある。美菜恵は高校時代から谷川を密かに恋し、彼女が後年教職を目指したのも谷川の影響があつてのことだった。

しかし、高校時代、美菜恵の思いは吐露されることがなかった。なぜなら、当時順子も谷川を恋しており、図書部の仲間にとのような告白の仕方が一番効果的か、意見を募ったりしていたからである。そのとき、清美が軽い思いつきで言った「雨の日ねらつてさあ、ずぶ濡れになつて玄関のベル押すつてのはどうだろうね」「でさ、ドアを開けた谷川に『ここしか来るところがなかったんです』っていうの」（1984 清美）という案を、こともあろうに順子はその通り実行したのである。これが高校三年の夏休みのことだった。谷川の住まいは教員住宅だったから、これがあつという間に知れ渡り大事になつたのは言うまでもない。

順子の谷川に対する思い入れの強さは並大抵のものではなかった。順子は三年間、谷川の担当する現代国語では百点を取り続けた。他の科目は軒並み赤点であつたのとは実に好対照である。順子は谷川の言葉を一言も聞き漏らすまいという姿勢で授業に臨んでいた。後年、角田直子が「順子はずっとそういうひたむきな目をして谷川の授業を聞いてたんじゃなかったと思うの。毎度毎度あんな目で見られ続けたらきつかったんじゃないの」（2000 美菜恵）と語っているのは、確かに当たっている。順子のまつずぐさは相手を恐れさせるものを持っていたのである。

順子が谷川に直接アタックしたのは一度だけでない。順子は卒業してすぐ再び谷川の家を訪れた。そのとき谷川は土下座して、「もう許してください」と言つたという。あれからかなりの時間が経過し、もはや順子にとって谷川は過去の人になつてゐる。しかし、その谷川に高校時代から好意を抱き、ついに結婚することになつた今でも、美菜恵はその事実にこだわりのついでに結婚することになつた今でも、美菜恵はその事実についてよいかもしれない。

そのこだわりがなぜ美菜恵から消え去らないのか。それは婚約中の谷川に彼女が物足りなさを覚えているからだ。谷川は表面的にはおだやかだし、優しい。しかし、披露宴を人生における大きな節目と捉え、これを一つのショーとして派手なものに演出しようとする美菜恵に対し、谷川はほとんど文句らしい文句を言わない。会費制にして二百名を集めようとすることにせいぜい異論を唱えたぐらいで、後は自分の意見を述べることもないのである。美菜恵にしてみると、谷川の本心が見えず、そのような中で自分が本当に愛されているのか自信が持てないの

だ。「谷川先生は無関心と包容力を勘違いしています」（2000 美菜恵）という美菜恵の発言は、谷川の本質を突いた批判だったのである。

披露宴の発起人会と称して、高校時代の仲間が集まつた。主婦である清美と桃子が帰つたあと、美菜恵は独身である直子の家に立ち寄らせてもらうのだが、直子の部屋は本人にとって気分よい部屋になつており、人の目、とりわけ男の目を気にしてそれに合わせようとする美菜恵のそれとは好対照である。美菜恵はそこで直子から現在の順子の写真を見せてもらう。「ねえ、なんで順子こんなに笑つてるの」と思わず美菜恵が尋ねてしまうほど、化粧つ氣がなく、シミと皺だらけながら笑顔を見せている順子の姿は彼女にとって衝撃的だった。見栄を張りながら生きてきた美菜恵からすれば、ありのままの姿で笑っている順子の心が解せなかつたのである。

いずれにせよ、順子は谷川とは全く無縁のところである。笑顔で暮らしている。順子へのこのわりを美菜恵自身が吹っ切れるかどうかは今後はかかっているのである。

その点から言うと、結末において谷川から思いがけず花火大会に誘われ、近くにいる谷川のおいが気にならないことを発見し、改めて彼を好きだと彼女が実感すること、さらには「わたし、マリッジブルーなんです」と素直に言えたことは、彼女が一步踏み出せたことを示している。それはまさに美菜恵が順子の呪縛から解き放たれた一つあるということでもある。

六

須賀静江は順子の母だが、男と一緒にいたり別れたりを繰り返して、順子にとって必ずしもいい母であつたとは言いがたい。そのことは本人も十分自覚している。静江の場合、男にいつも騙される女というイメージが伴う。彼女にしてみると、どの男も最初がいいと思えるのだが、いつしか彼らは豹変していった。しかし、これは彼らが豹変したというよりも、もともと彼女の側に男を見る目がなかったと言ふべきではないか。その点、娘の順子はたとえ入籍していても一人の男と暮らし続けていた。静江からすると、それが疎ましくもあつたし、彼女の娘に対する劣等感でもあつた。

その静江も六十歳を迎えていた。スーパーの店員を勤めていたが、それまでの

レジ係から水を扱う総菜部に異動となった。ここに配属された人たちは誰もが長続きせず、ほどなく退職していく。その点からすれば、これは体のいい退職勧告だったとも言える。おまけに付き合っていた男は若い女と仲良くなり、彼女のもとを離れて行った。このような中、静江が今後の生活に不安を覚えたのは無理もない。そのときにふと思いついたのが、東京で暮らす娘だった。静江はあわよくば娘の世話になれるかもしれないという密かな期待を抱きつつ、「宝食堂」を訪れたのである。

だが、順子の生活ぶりを目の当たりにしたとき、静江の淡い期待は脆くも消え去った。店が繁盛しておらず、娘が切り詰めた生活をしているのは疑いようもなかった。順子には輝（あきら）という名の一人息子がいた。国立大学の二年生だという。トイレに関心があり、恵まれない外国を何とかしたいと語るその姿はひたむきで、全くすれたところがなかった。輝のまっすぐな目は順子のそれと繋がるものがある。その彼は目の重い病気を抱えており、角膜の手術が必要であることも娘からは聞かされた。それもお金がかかるだろう。それらを総合して考えると、とても静江が養ってもらえる余裕は見出すことができなかったのである。

この母子は久しぶりに再会したのだが、このとき「自分の娘がこんなふうに笑うところを、思いだそうとすることができない。そもそも母親の前で笑うような子供だったろうか」（2005 静江）という記述が見られる。かつて一緒に暮らしていた頃、静江は付き合う男のことばかりに意識が向けられ、とてもではないが順子に目を向ける心の余裕はなかった。そのような状況の中、順子も笑顔を見せることはなかったのかもしれない。しかし、駆け落ち後の順子はいつも笑顔を見せていることを誰もが証言している。おそらくこの笑顔は作りものではない。周囲から見れば、化粧つ気もなく、みずばらしい格好をして惨めにしか思えない状況なのに、順子はごく自然な形で笑顔を見せている。それは彼女が心の底から「しあわせ」を感じているからである。

しかし、その順子も心の底には過去の傷を抱えていた。それはとりもなおさず、「菓子や 幸福堂」の女将、福吉弥生へのお詫びの気持ちである。「1993 弥生」の結末近く、弥生が恭一郎との再会を終え、「終着駅」を出て商店街を後にするとき、振り返ってみるとそこには恭一郎と順子、輝の三人が立っていた。その中で順子は弥生に向かって深く頭を下げる姿が印象的に語られていた。そればかりではない。順子は順子なりに詫びる気持ちを形にしようと思ったのである。

「お母さんごめん。わたし昨日嘘ついた」

静江は外に視線を外し、宝食堂を探しているふりを続けた。

「お父ちゃんに保険を掛けてないっていうの、嘘。ちゃんと入ってる。でも受取人はわたしでも輝でもないの」

「じゃあ、誰」

「幸福堂の女将さん。それしかお詫びの方法を思いつかなかったんだ」

切り詰めた生活と、報われない詫びと、いずれ角膜の移植手術をしなくてはいけない息子。それらぜんぶを背負いきらねばならないほど、この子はどんな悪いことをしたんだろう。静江の視界にあったビル群が青空の下で曇った。

（2005 静江）

静江は自分のことを「あてにならない母親」と評していた。切り詰めた生活の中でやりくりをし、幸福堂の女将にまで詫びる方法を考える娘の姿を目の当たりにしたとき、一時は彼女に縋ろうとまでした自分の愚かさを静江は痛感したに違いない。

七

角田直子も須賀順子の同級生の一人で、内科病棟の内科主任を務めている。他の同級生たちが順子とは疎遠になっている中で、直子は確実に順子と連絡を取り合っていた。それというのも、輝が目の重い病気にかかっていることもあり、順子が看護師である直子が必要としていたためである。

直子は曲がったことの嫌いな性格で綽名は「直角」。名前そのものがその性格を表していると言うべきか。

直子は両親が交通事故に遭い、三年以上の昏睡の末亡くなった。その結果今は頼る家族もなく、まったくの一人である。彼女の部下に村下美野里という看護師がいるが、彼女は岩見沢の実家とは疎遠になっている。美野里は幼い頃の家庭環境の影響もあって、親がいながら「天涯孤独」を選んだ。同じ一人暮らしであっても二人の内実は決定的に異なっている。

順子から直子に早めのクリスマスカードが届いた。そこには「月の半ば過ぎに

ちよつと病院に入るので、今年は少し早めのカードです。ただの検査入院だから心配なし」という言葉が添えられていた。十二月半ば過ぎの入院というのであれば、恐ろしく暇な病院か急いでいるか、どちらかだ。そのことに「嫌な予感」を感じた直子は無性に順子に会いたくなり、連絡をとることになった。

このようにして二人は東京のホテルのラウンジで待ち合わせをするのだが、そこに現れた順子は痩せこけており、彼女が末期の患者であることは明らかだった。順子自身もそのことは十分自覚していることは彼女の言葉で分かったが、彼女の様子からは迫っている死を恐れているようには見えない。

息子の輝のことが話題になると目がいきいきと輝き出す。輝は大学院に通いながら教授の設計事務所でアルバイトもしており、そのままそこで正式に働かせてもらえそうで、そうなると研修でスペインに行くこともできるというのだ。「お父ちゃんもわたしも、毎日輝の話を聞くのが楽しみなの」という順子の言葉は実に象徴的である。かつて全てから逃げ出したいと言って泣いた「お父ちゃん」を見捨てることができず、彼との駆け落ちを図った順子はいまその「お父ちゃん」と一緒に息子の話を聞くのを楽しみにしているのである。順子の妊娠が判明したとき、堕胎をするか、「お父ちゃん」が逃げ出すかしていたら、今のようない「しあわせ」な日々は訪れなかったはずだ。順子はさらに続ける。

「実家の母がこつちに来てくれることになってね。男所帯だと、なにかと不便だし。あれこれと頼めるの、やっぱり実の母親しかいなくて」

順子が「ねぇ直子」とまた瞳を輝かせている。

「わたしね、このとおり内臓はほとんどぼろぼろなんだけど、目だけは元気だったの」

春からは、自分が輝の目になって、世界を見ることができると笑う。

「死ぬことを楽しみにしちゃいけないんだろうけど、なんだかやっぱり楽しみなんだよね」

輝はいずれ角膜移植の必要があった。なぜか、順子はそのひとことを伝えるためにやってきたような気がした。

彼女の意識は、自分が息子の手術の成功を見ることができないという事実には向けられていない。息子に角膜を残せることを語る順子はもう、目前に迫る自分の死さえも忘れているのかもしれない。

(2009 直子)

母親の静江がやって来るようになったのは、おそらく順子からの依頼があったからに違いない。かつては自らを「なんのあてにもならない母親」と卑下していた静江にとって、長い間疎遠だった娘から頼りにされたことは、娘の容態が悪化していたとは言え、嬉しいことであつたはずだ。娘になり代わって世話をできるということ、静江は己の存在価値を実感できたのである。

この引用箇所注目されるのは、順子の関心が自分の死を忘れたかのように息子の角膜移植に向けられていることである。自分の角膜が息子のために役に立つということが、今の順子の心を支えている。そこに悲壮感はない。森鷗外『山椒大夫』の中でも、自分が犠牲となつて弟の厨子王を逃がそうと決意したときの安寿は目を輝かせていた。順子も安寿も、そこに自己の死を恐れる様子はなく、むしろ肉親を生かすことができるという自分の役割を認識できたことで、充実感を覚えているのである。

順子の話を聞く直子は、既に両親を失っていた。交通事故で重体に陥り、三年間の昏睡状態を経て両親は死に至つたが、ずっと「呼吸する亡骸」の状態を両親に強いたことに直子は今でも罪悪感を覚えている。「直子にとって、生活とは己の力で呼吸することだった」との一文があるが、そう考える直子からすれば両親の最期はあるべき姿には思われなかったのである。今目の前で自分の角膜が息子の役に立つことを生き生きと語る順子は、少なくとも自分で納得できる最期を迎えようとしている。それがまさに「生きる」ということではないか。

順子の目はそう遠くない将来、世界を見るために旅に出る。本人が喜んでいくことは、やはり喜ばしいことなのだ。直子はひとつ息を溜め、万感の思いを込めて尋ねた。

「順子、幸せなんだね」

「もちろん」

そこだけ高らかな声で応えた。

(2009 直子)

若くして命を閉じていこうとする順子を憐れむことは簡単である。だが、ここ大切なのは順子自身がその中にあるにも自らを「幸せ」と胸を張って言えているということである。それは強がりではない。彼女は限られた人生の中で精いつ

ばい納得できる生き方を選択できたのである。そのことに対しては何の悔いもない。

夜の底で輝いている色とりどりの電飾がぼやけた。

視界に、図書室の窓から眺めていた夏の湿原が広がってゆく。どこまでも緑だ。

湿原を一本の黒い川が蛇行している。うねりながら岸边の景色を海へと運んでいる。曲がりながら、ひたむきに河口へ向かう。

みんな、海へと向かう。

川は、明日へと向かって流れている。

(2009 直子)

作品はこのようにして幕を閉じる。「みんな、海へと向かう」の「みんな」とは、この作品に登場するすべての人を指しているのだろう。彼女たちはそれぞれ蛇行しながら「明日」、そして最終的には「海」(死)に向かっていくのだ。

この作品は須賀順子を軸としながらも、彼女とそれぞれ何らかの形で関わりを持った女性たちを視点人物とする短編を重ねて構成されていた。彼女たちはいずれも自分の「しあわせ」に自信を持ってないでいたが、順子が語る「しあわせ」な姿に接することによって自己を対象化するきっかけを掴んでいた。彼女に反応するにせよ、疑問を抱くにせよ、あるいは共感するにせよ、何らかの反応をすることが彼女たちの次の行動を誘発していたのである。

この作品のタイトルは「蛇行する川」ではなく「蛇行する月」である。おそらく「蛇行する月」とは須賀順子の生き方そのものを象徴しているのではないか。太陽のように眩しいものではないが、誰にも等しくやさしい光を注ぎ込む存在として須賀順子はある。そして読み終えたとき、読者に改めて「しあわせ」とは何なのかを問いかける作品として『蛇行する月』はある。